

新型標識導入が歩行者の安全性に及ぼす効果に関する研究

平成 26 年 2 月 内山 拓真

要旨

目的

横断歩道横断中に発生する交通事故は、重大事故につながりやすく、特に夜間では、横断者がいるにも関わらず、それに気づかずに起こる死亡事故が多発している。そこで、長野県警察本部では既存の標識を改良し、夜間に外周が点滅する標識を開発した。昨年度行った調査により、安全性の向上に対して一定の効果が見られることがわかったが、本研究では 1 年経過したことにより、標識の安全性に及ぼす効果に変化が生ずるのか否かについて検討を行った。

方法

運転者、横断者から横断歩道の安全性向上について分析を行った。まず、客観的な観点から、ビデオによる交通流の観測を行い、横断歩道の安全性に対する調査を行った。次に、主観的な観点から、横断者及び運転者にアンケート調査を実施し、利用者の意識についても調査した。昨年度と今年度のアンケートの結果を用いて、母集団の平均の検定を行い、標識が安全性に及ぼす効果の変化について比較を行った。

結論

交通流の観測結果により、昨年度の導入直後時と同様に、横断者が横断歩道を渡ろうとする際に通過する車両は減少し、停車する車両が増加する傾向が確認できた。さらに、アンケートにより多くの横断者及び運転者が標識の導入によって安全性の向上を期待していることが確認できた。そのアンケートの結果を昨年度のデータと比較し、分析したところ、運転者には、時間経過による結果に差がないことが検証された。したがって、標識導入から 1 年が経過した現在でも標識による安全性の効果が持続されていることがわかった。一方で、横断者は標識の導入により、昨年度よりもさらに安全性の向上を実感していることが検証された。

指導教員 高瀬 達夫 准教授